

「主が心を開かれた」使徒言行録16章11～15節

細井 茂徳

パウロの第二回伝道旅行について学んでいます。アジアのトロアス港からエーゲ海を渡ったパウロたち一行は、ネアポリス港に着き、更に内陸へ十数キロ離れた所にあるローマの植民市フィリピに到着します。いよいよ福音がヨーロッパに初めて入った様子を、ここから読み取ることができます。神が開いてくださった伝道の扉であります。

ところが、ここフィリピでの伝道は、決して容易なものではありません。ローマと深いつながりのあるこの町は、皇帝崇拝や偶像礼拝が盛んな上、会堂はなく、ユダヤ教の力もユダヤ人もほとんど及ばなかったところだと考えられるのです。この時のパウロたちにとって、全くの未体験ゾーンであったでしょう。しかし、彼らは神から示された場所故に、実直なまでに、この地に果敢に挑んでいったのです。

川岸で持たれていたユダヤ人の集まり「**祈りの場**」へ赴き、そこで話をしました。その中に「**ティアティラ市出身の紫布を扱う商人で、神を崇めるリディアと言う女**」がいました。この人が、パウロの話を聞いて神を信じる者となったのです。フィリピ伝道の最初の実りとなった、いいえ、ヨーロッパ伝道の最初の実となったのです。神は、この一人の婦人に目を留められて、彼女の心の扉を開かれたのでした。「**主が彼女(リディア)の心を開かれたので、彼女はパウロの話を注意深く聞いた**」とルカは記しています。神がパウロの言葉を通して、彼女の心を開かれたのです。神がこの出来事の主体者であられるのです。

心開かれたリディアの応答は速やか、且つ具体的なものでした。彼女だけでなく、彼女の「**家族の者**」も洗礼を受けさせ、家庭を解放して、パウロたちを迎え入れました(15節)。しかもこれは、一時的な感激や感情にすぎないものではなかったのです。フィリピにおける伝道はこの家を拠点として展開されていき、その後もずっとパウロの伝道を最もよく助ける、愛とまことに満ちた教会へと成長していったのです。

リディアの心を開いてくださった主が、この礼拝に集う私たちの心をも開いてくださることを期待して、信じて、主の働きかけを祈り求めながら、共に歩んでまいりましょう。